



第2次隊の受難と第3次隊のタロ・ジロ発見

運命の1958年2月24日

第2次隊を乗せた観測船「宗谷」が日本を出港したのは、1957年10月21日。前年の第1次隊より18日早い出発でした。シンガポール、南アフリカのケープタウンを経て、暴風圏を通過し、順調に昭和基地に向けて氷海を進んでいたかに思えた「宗谷」は、12月31日、氷に閉じこめられて身動きが取れなくなります。それからおよそ40日間、積み重なって厚く広く固まった海氷とともに、「宗谷」は漂流することになりました。

1958年2月、アメリカの砕氷艦「バートン・アイランド号」の救援もあり、昭和基地の第1次越冬隊員11人と子犬6頭を小型機で無事に「宗谷」に収容しました。その後、「なんとか第2次越冬を成功させたい」という思いから、3人の隊員が昭和基地に飛びましたが、気象条件はますます悪化。空輸の可能性があと1便しかないという状況だったため、「最悪3人での越冬も可能であり、カラフト犬も多数いるので、このまま準備を続けたい」という隊員たちの訴えは退けられ、3人に帰船命令が出されました。やむなく3人は、残っていた子犬2頭と母犬シロ子を連れて小型機に乗りましたが、重量オーバーとなったため、私物や予備燃料等を下ろし、かろうじて「宗谷」に戻りました。

一向に天候は回復せず、また、飲料水や燃料不足に加え、度重なる損傷で「宗谷」の安全性が保証できない等の事情により、1958年2月24日、とうとう“第2次隊越冬断念”の決断が下されました。15頭のカラフト犬たちを昭和基地に残したままの、無念の帰国でした。



【宗谷（左）とバートン・アイランド号（右）】



【幻の第2次越冬隊】

生きていたタロとジロ



【タロ・ジロ発見】



【トチ（左）・アク（中央）・ミヤ（右）】

第2次隊の苦い経験から、「宗谷」を大改装し、大型ヘリコプターを2機搭載できるようにして、1958年12月、第3次隊は再び南極を目指して日本を出発しました。そして翌年1月14日、「宗谷」から一番機が飛び立ち、昭和基地が見えてきたとき、隊員の目が2頭の犬の姿をとらえたのです。

第1次越冬隊で犬係だった北村泰一隊員が、第3次隊にも参加しており、その2頭がタロとジロであることを確認しました。無人の昭和基地で、タロとジロは何を食べて生きのびたのでしょうか？基地に残されていた犬のエサ（身欠きニシン）には手がつけられていませんでした。

基地に残された15頭のうち、鎖につながれたまま死亡していたのは7頭、行方不明は6頭。生存したのはタロ・ジロの2頭だけでした。

第3次隊はトチ・アク・ミヤという3頭の子犬を連れて行きました。タロとジロは、3頭の子犬と仲良く過ごしました。子犬とケンカすることはなかったそうです。